

報 告

看護学科における初年次教育の取り組み

高橋 甲枝*	目野 郁子*	新谷 恭明*	前田 由紀子*
一期崎 直美*	笹月 桃子*	溝部 昌子*	吉原 悦子*
財津 倫子*	中原 智美*		

＜要 旨＞

本稿では 2018 年度より全学的にスタートした初年次教育（初年次セミナー）の看護学科における教育プログラムを検討し、実施したので報告する。

「初年次セミナー」では、1 年生を対象に、スタディ・スキルの基本を学び強化を図った。さらに、看護専門職としてのキャリアデザインと将来の進路への動機づけとなる内容を含めた。スタディ・スキルの修得には、スモールステップ法を用い、レポートは文字数と課題のレベルをあげていった。学生の到達度自己評価では 90%以上のものが目標を達成した。また、図書館等の利用率も高かった。今後は、教育プログラムの改善に向けて評価指標の検討を行う。

キーワード：初年次教育、スタディ・スキルズ、情報リテラシー、看護教育、スモールステップ

I. はじめに

少子化の影響を受け 18 歳未満の人口減少と進学率の上昇に伴い、大学は全入時代を迎えている。また、各大学で実施されている入試方法の多様化がこのような状況に拍車をかけ、結果的に学習意欲の低下や目的意識の希薄な学生が多く進学することになった。そのような中、2008 年に中央教育審議会は、「学士課程教育の構築に向けて（答申）」で、初年次教育の必要性を提言した¹⁾。文部科学省は、初年次教育について、「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム」と定義している²⁾。平成 27 年度の大学における教育内容等改革状況調査によると、97%の大学が初年次教育を実施しており、初年次教育の具体的内容は「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」88.6%、「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表技法を身に付けるためのプログラム」82.3%となっている²⁾。このように初年次教育は、高校までの学習と大学での学び（学修）とのギャップを埋め、大学での本来の学びのために、ますます重要

である。

現在、看護系大学では 8 割以上が初年次教育を実施しており³⁾、教育の効果・評価の試みがなされている。看護系大学における初年次教育の先行研究では、スキルの向上を目的とした「聴く力」⁴⁾、「読む力」⁵⁾、「書く力」⁶⁾、や「討議法」⁷⁾の教育効果を分析したもの、社会人基礎力の向上との関連について検討したもの^{8, 9, 10)}、さらに、自己教育力・自己管理能力に焦点をあてたもの¹¹⁾がある。

本学看護学科では、従来、少人数の学生を対象にアドバイザー制度を導入し、1 年生の学習支援と生活支援をアドバイザーが担ってきた。2006 年度からは学科のカリキュラム改定に伴い、専門基礎教育科目の中に基礎学習演習ゼミを配置し、初年次教育を実施した。2009 年度には初年次教育プログラムの充実を図るため、初年次・2 年次教育へと移行した。2018 年度には、全学的に教養教育（総合人間科学）の見直しが行われ、初年次教育は、初年次セミナーとして教養教育（総合人間科学）のなかで、全学全学科共通科目として実施されることになった。初年次セミナーは I（前期）と II（後期）からなり、講義内容は、全学科共通講義を基盤に、学科独自の内容を取り入れた形で構成されて

* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科

いる。

看護学科では今までの初年次教育の実績を踏まえ^{12, 13, 14)}、学生の自己評価が低かった【書く力】と【考える力】¹²⁾に重点を置いて教育プログラムを検討し、初年次教育・初年次セミナーのあり方、方法について議論を積み重ね、実施にいたった。本稿ではその教育プログラムの内容と学生の授業評価、その課題について報告する。

II. 初年次セミナーの概要・授業内容

1. 初年次セミナーのカリキュラム上の位置づけ

看護学科における初年次セミナーのカリキュラム上の位置付けを図1に示す。

看護学科のカリキュラムは、総合人間科学と専門教育科目から構成されている。総合人間科学は、キリスト教を基盤とする総合的視点と豊かな人間性を養うた

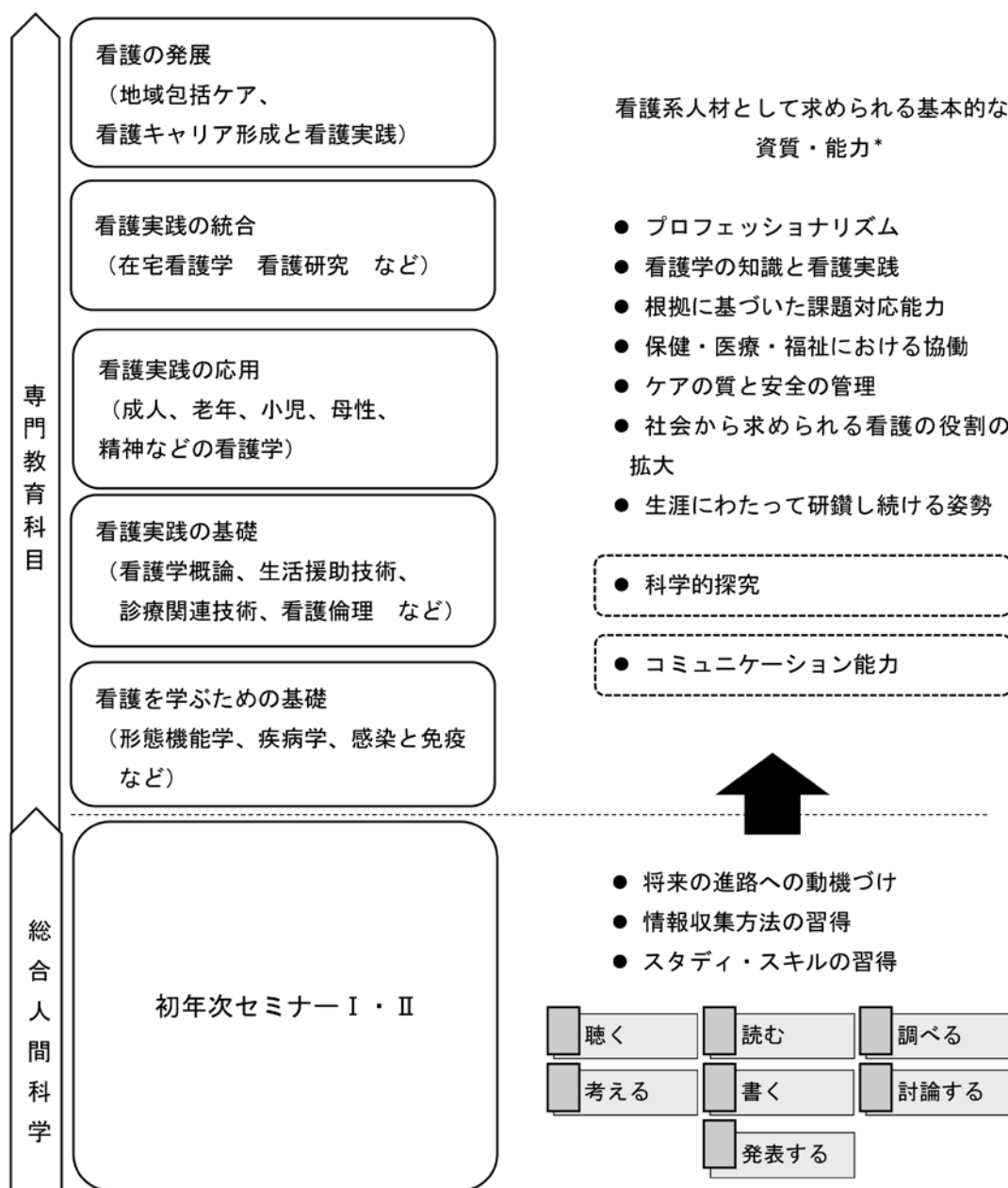


図1 初年次セミナーのカリキュラム上の位置づけ

*看護学教育モデル・コア・カリキュラム 平成29年10月
大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会¹⁵⁾

めの教養教育課程であり、初年次セミナーは、その中に位置づけられている。

初年次セミナーⅠでは、1年生を対象に、大学で学ぶためのスタディ・スキルの基本である「聴く」、「調べる」、「読む」、「書く」、「考える」の強化を目的としている。初年次セミナーⅡでは、初年次セミナーⅠの学びの強化と定着を図り、加えてプレゼンテーションの力を身につける。また、他者に伝える力、物事を多面的・多角的に捉えて思考する力を身につける。

看護学科では、初年次セミナーを専門教育科目（「看護を学ぶための基礎」、「看護実践の基礎」、「看護実践の応用」、「看護実践の統合」、「看護の発展」）の基盤科目と位置づけ、専門教育を学ぶための導入科目としている。

そのため初年次セミナーには、上記スタディ・スキルの修得のみならず、看護専門職としてのキャリアデザインと将来の進路への動機づけとなる内容も含めた。また、看護系人材として求められる9つの基本的な資質・能力（「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」、2017）¹⁵⁾のうち、「コミュニケーション能力」、「科学的探究」の育成につながるように基礎的スタディ・スキルおよび情報収集の修得の強化を目指した。

なお、科目担当教員は10名で看護専門職・専門基礎・教養系の教員で構成した。教員1名が約10名の学生を担当した。グループの主体性や対話を促す効果¹⁰⁾をねらい10名を2グループにわけ、1グループ5名でグループワークを行わせるようにした。

2. 初年次セミナーの講義概要と内容

1) 初年次セミナーⅠ

初年次セミナーⅠの講義概要と内容を図2に示す。

初年次セミナーⅠは、前期に開講する1単位30時間（15回）の必修科目である。講義計画の内容を検討するに際し、前田らが報告した「初年次教育実施後の学生の自己評価」を参考に¹²⁾、「形式的レポート作成力」、「意見と事実を分けて書く力」、「論理的構成力」の強化に重点を置き講義計画を立てた。加えて、学生のキャリアデザインと将来の進路への動機づけのために、「なぜ看護学科を選んだのか」というテーマでラベルワークを活用しグループで話し合わせた。さらに、臨床現場の看護師に「看護の世界」について講義をしてもらい、意見交換とその内容をミニレポートにまとめさせた。

本科目の講義概要は4つのStepからなり、「学びの基礎」、「ミニレポート作成」、「課題レポート作成」、「課

題発表」としており、基本的なスタディ・スキルズ（聴く、調べる、読む、書く、考える、話す）に、看護学科独自に「語る」を追加し、7つの力を個人ワークとグループワークを通して学習する構成とした。なお、「話す」は言葉で伝える、「語る」は論理的に相手に伝える、と定義した。

Step1「学びの基礎」は、講義回数5回で、レポート作成に必要な学びの基本を中心に講義を実施した。全学共通講義として、問題意識をもち学修する必要性や講義の聴き方、ノートの取り方、情報倫理の基本などを学び大学教育の導入を図った。その後、学科で検討した講義内容として、レポートの書き方・本の読み方や文献カード記載方法を学ばせた。さらに看護学科では、ポートフォリオの作成を導入したため、その概要についても説明を行った。情報倫理教育は「情報システム課」と、図書・雑誌検索は「図書課」と連携し行った。学生には、基本スキル習得に向け、受講後に毎回500字程度で講義概要をまとめ、受講後の疑問点や調べたことを記載するよう指導した。

次にStep2～4はレポート作成に必要なスタディ・スキルズを、繰り返し鍛錬することで、基本スキルを獲得できるような講義内容にした。

まず、Step2では、「ミニレポートの作成」を行った。講義回数は3回（スタディ・スキルズ習得1）で、学生には1,000字程度でレポート作成を課した。ミニレポートでは教員が提示したレポート課題について構成を考えレポート作成を行わせた。

Step3「課題レポート作成」は、講義回数2回（スタディ・スキルズ習得2）で、2,000字程度のレポートを作成した。内容は、『看護に関わること』からグループで課題を見だし、文献検討を行い、課題を明確化する過程を経て、それぞれの課題についてレポートを作成させた。

さらに、Step4「課題発表」は、講義回数2回（スタディ・スキルズ習得3）で、課題レポートの要旨を200字程度で作成しグループ内で発表させ、質疑応答を行わせた。そして学生間での質疑応答をもとにレポートの修正をさせた。

以上、初年次セミナーⅠでは、スモールステップ法を用いて、500字程度から2,000字と一気に文字数を増やさず、段階的に文字数を増やす取り組みと、与えられた課題から自ら考えて課題を見出すというように、レベルを上げつつスキルを磨くという授業設計にした。

看護学科における初年次教育の取り組み



図2 初年次セミナーI 講義概要(A)と内容(B)

2) 初年次セミナーⅡ

初年次セミナーⅡの講義概要と内容を図3に示す。

初年次セミナーⅡは、後期に開講する1単位30時間(15回)の必修科目である。

本科目の講義概要は4つのStepからなり、「学びの基礎」、「課題レポート→小冊子作成」、「課題レポート→発表準備」、「課題発表」としており、基本的なスタディ・スキルの強化・鍛錬に加え、「発表する」「討論する」など9つの力を個人ワークとグループワークを通して学習するような構成とした。学生は、他者と協働しながら学習を進めていく。加えて、学生のキャリアデザインと将来の進路への動機づけのために、4年生から「学びの必要性について」の話をしてもらった。

Step1「学びの基礎」は、講義回数2回で、初年次ⅠからⅡへの学びの導入とした。共通講義として、初年次セミナーⅠで学んだスキルを鍛える必要性について講義した。また、初年次セミナーⅠで習得が難しいと思われる文献収集については、再度講義を行った。新たな内容として、クリティカルシンキングの必要性、発表および討論する力、研究倫理について講義を行った。

次にStep2～3は、課題レポートを作成した上で、その課題をStep4の発表に繋いだ。「課題レポート→小冊子作成」は、講義回数7回(スタディ・スキルズ習得1)で、『前期での学びから課題を見いだす』ように指示し、各グループで課題テーマについて文献検討を行い、1グループ5人で5つの項目(以下章とする)を考えさせた。

学生は1人1章を担当し、2,000字程度のレポート作成を行った。作成したレポートについては、グループ内で発表、質疑応答を行い、修正点を明らかにし、各自修正を行った。その際、用語の統一や方向性の確認を行い各自のレポートのブラッシュアップをはかった。小冊子は単なる学生のレポートを寄せ集めたものではなく、全体を通して論理的な構成をなすものである。そのためどのような内容のものにするか、章立てをグループ内で話し合わせた。そして適切な序論と結論を付し一冊の小冊子として編集させた。

Step3「課題レポート→発表準備」は、講義回数2回(スタディ・スキルズ習得2)で、小冊子のレジュメを作成し、スライドおよび発表原稿を作成させた。そして、事前練習では、評価指標をお互いに確認しながら声の大きさ、スライドの見え方などをグループ内で検討、修正を行わせた。

Step4「課題発表」は、講義回数4回(スタディ・

スキルズ習得3)で、発表→討論→振り返りをさせるものである。司会、タイムキーパー、撮影係を決め、学生たちで運営を行わせた。発表後、質疑応答をさせ、その後、評価表に沿って自己評価・他者評価をさせた。評価表の集計を行い、高得点の2グループには最終日に全体に対して発表を行わせた。各グループは、自分たちの発表動画をみながら発表姿勢、声の大きさなどを確認するとともに、他者評価をもとにグループで討論して振り返りを行った。

以上、初年次セミナーⅡは、Ⅰに比べ、グループワークの回数を3回から8回に増やし、「発表」「討論」を強化するスキルを追加し、難易度を上げる構成にした。また、協働学習を進め、かつ各自が役割を分担し主体的な学びに繋ぐため^{16,17)}、一つの課題についてグループで小冊子を協働編集・作成し、全員で発表するという授業設計にした。この手法は、グループワーク活動に対して「手抜き」¹⁸⁾を行うフリーライダー¹⁹⁾をなくすことにもつながる。

3) 初年次セミナーⅠ・Ⅱにおけるポートフォリオ作成

初年次セミナーⅠ・Ⅱにおいて、「成長過程の確認」「自己分析・自己認識・自己発見」²⁰⁾のためすべての過程において、ポートフォリオを作成し講義で学んだ知識の振り返りを行わせた。それぞれのStepで、スタディ・スキルズを駆使し、そのレベルに応じたりフレクションを行い、次の段階へと進めていった。そのため、毎回の講義後に振り返りをさせて、ポートフォリオを提出させた。提出期日・時間を設けて時間管理や基本的な約束を順守するよう指導した。さらに、教員からのコメントに対する修正や返答、ポートフォリオの整理について、教員は個別に指導を行った。

看護学科における初年次教育の取り組み



図3 初年次セミナーⅡ 講義概要 (A) と内容 (B)

Ⅲ. 初年次セミナー I・IIの授業評価

授業評価には大学の授業評価アンケートを用いた。学習到達度自己評価を表1に示す^{21, 22)}。

初年次セミナー I・IIの学生の到達度評価は、5段階評定（「全くそうでないと思う：1点」～「かなりそうだと思う：5点」）で、「自分なりに目標を達成した」は、初年次セミナー Iの平均点4.1点、IIは3.9点、「知識を確認、修正したり、新たに得ることができた」は、初年次セミナー I・IIそれぞれ4.3点・4.1点、「事象を理解する視点や考え方を得ることができた」は4.1点・3.9点、「コミュニケーション力や表現力を高めることができた」はともに4.2点であった。到達度評価を「かなりそうだと思う」、「わりにそうだと思う」、「まあまあそうだと思う」という肯定的な評価は、すべての項目で90%以上であった。しかし、「かなりそうだと思う」と回答したものは、初年次セミナー Iに比べIIの割合が低下していた。

次に学習量の評価を表2に示す。

「授業に参加するために、1回30分程度以上の準備」が0回であったと回答したものは、初年次セミナー I・IIそれぞれ、10.5%・10.8%であった。「授業を振り返るために、1回30分程度以上の復習」が0回と回答したものは、それぞれ16.2%・19.6%と初年次セミナー IIの方が予習復習をしていない学生が多くみられた。また、「授業に参加するために、1回30分程度以上の準備」を4回以上行ったものは、初年次セミナー I・IIそれぞれ61.9%・54.9%で、「授業を振り返るために、1回30分程度以上の復習」を4回以上行ったものは、それぞれ、44.8%・32.4%で、初年次セミナー Iに比べIIの方が、予習・復習ともに回数が少なく、復習よりも予習の回数が多い傾向がみられた。

図書館等の利用状況について表3に示す。

「図書館の図書、雑誌を利用した」は、初年次セミナー I・IIそれぞれ94.3%・92.1%、「CiNiiなど図書館から利用できる学術データベースを検索し、利用した」は、それぞれ、93.3%・91.2%、「インターネットのホームページを検索し、利用した」は、それぞれ93.3%・93.1%であった。いずれも高い利用率であった。

表1 初年次セミナー I・IIの到達度自己評価

項目	初年次	n	平均値	かなり	わりに	まあまあ	少しそう	全くそう	無回答	%
				そうだ と思う	そうだ と思う	そうだと 思う	でない と思う	でない と思う		
自分なりに目標を達成した	I	105	4.1	28.6	50.5	20.9	0.0	0.0	0.0	
	II	102	3.9	25.5	47.0	24.5	2.0	1.0	0.0	
知識を確認、修正したり、新たに得ることができた	I	105	4.3	41.9	47.6	10.5	0.0	0.0	0.0	
	II	102	4.1	37.2	41.2	20.6	0.0	1.0	0.0	
事象を理解する視点や考え方を得ることができた	I	105	4.1	32.3	45.7	20.0	1.0	0.0	1.0	
	II	102	3.9	27.4	38.2	30.4	2.0	2.0	0.0	
コミュニケーション力や表現力を高めることができた	I	105	4.2	41.0	41.0	17.0	1.0	0.0	0.0	
	II	102	4.2	35.3	45.1	19.6	0.0	0.0	0.0	

*：引用 21, 22 授業評価アンケートに加筆

表2 学習量の評価

項目	初年次	n	回数					%
			0回	1回	2.3回	4.5回	6回	
授業に参加するために、1回30分程度以上の準備をどのくらい行いましたか	I	105	10.5	7.6	20.0	26.7	35.2	
	II	102	10.8	13.7	20.6	28.4	26.5	
授業を振り返るために、1回30分程度以上の復習をどのくらい行いましたか	I	105	16.2	13.3	25.7	21.9	22.9	
	II	102	19.6	24.5	23.5	17.7	14.7	

*：引用 21, 22 授業評価アンケートに加筆

表3 図書館利用状況

	初年次	n	利用しなかった	利用した	無回答
					%
この授業では、図書館の図書、雑誌を利用した	I	105	4.8	94.3	0.9
	II	102	5.9	92.1	2.0
この授業では、CiNii など図書館から利用できる学術データベースを検索し、利用した	I	105	5.7	93.3	1.0
	II	102	6.8	91.2	2.0
この授業では、インターネットのホームページを検索し、利用した	I	105	5.7	93.3	1.0
	II	102	4.9	93.1	2.0

*：引用 21, 22 授業評価アンケートに加筆

IV. 考察

1. 大学授業評価アンケート

1) 到達度自己評価

大学の授業評価アンケートから学生の到達度評価は、平均得点も高く、概ね目標に到達していることがわかった。初年次セミナーが、学生の学びに一定の効果を示したと考えられる。加えて、将来の進路への動機づけとして臨床看護師や4年生の話を講義に取り入れたことで、臨床現場や進路に対する多くの質問や、課題レポートに看護・健康に関するものが見られ、学生が講義に興味関心を示した様子が窺えた。

初年次セミナーⅡの到達度をみると、到達度は初年次セミナーⅠよりも低かった。特に初年次セミナーⅡでは、「発表する」、「討論する」力を強化するためにプレゼンテーションを取り入れ、「コミュニケーション力・表現力」の到達度自己評価の上昇を期待した。ところが、「かなりそうだと思う」と回答する割合は、初年次セミナーⅡがⅠよりやや低くプレゼンテーションを導入した効果は認められなかった。初年次セミナーⅡには、スライドを用いた発表・討論が含まれており、コミュニケーションが苦手な学生にはハードルが高かったと思われる。

初年次セミナーⅠにグループワークを利用し、話す・聴く機会を増やしⅡに繋ぐ必要がある。

2) 学習量の評価

学習量の評価をみると、初年次セミナーⅠに比べⅡの方が自己学習した回数が減少している。初年次セミナーⅡは、後期科目である。同時期に看護技術などの演習科目が開講され、他科目の課題も増えたことで、学生の負担感が増し、予習・復習の回数が減少した可能性がある。また、0回と回答する学生が10%から

20%程度おり、看過することはできない割合であった。グループ間での学修を通して、予習・復習をする習慣を定着させていく必要がある。

3) 図書館等の利用状況

図書館利用率は、到達度90%以上と高かった。これは、講義に図書や雑誌の検索演習を行い、課題にそってレポートを書くために、図書や雑誌を活用したり、論文を検索したりするように指導した成果と思われる。しかし、インターネットを利用し、資料価値の低いブログなどを文献として持参する学生がいたり、インターネット上の記事をコピー&ペーストしてレポートを作成する学生もいた。そのため、信頼性の高い資料や質の良い文献を選ぶスキルや研究倫理についても繰り返し指導する必要がある。

2. ポートフォリオ作成

ポートフォリオ作成は、学生のモチベーションを高め、自立・自律させることにより、将来の目標を定めるきっかけをもたせることにあり、そのツールとして有効であるといわれている²³⁾。担当教員はポートフォリオ作成指導やポートフォリオ提出に対してコメントを行い、個別指導を行っている。ポートフォリオの導入は途中でフィードバックが重要であり、学生が自分の学びや学び方を振り返ることができるような介入を意図して行うことは、学修の動機づけにも繋がっていると考える。

しかし、今回は大学授業評価アンケートを用いた検討であるため、結果をそのまま改善に反映させることには繋がらない。今後、学科で初年次セミナーの評価を行うための指標を検討する必要がある。

V. おわりに

2018年度から、初年次教育である初年次セミナーが全学的にスタートした。初年次セミナーで強化したスタディ・スキルズは、今後の看護基礎教育の基盤となるもので、看護学科では、学生に将来的に求められる学問的職業的スキル、特に「書く力」、「考える力」に重点をおいた。今後は初年次セミナーのプログラムの効果を評価する指標を検討し、「書く力」「考える力」を育てるための指導内容と指導法の改善を行っていききたい。

引用文献

- 1) 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて(答申) 文部科学省. 2008
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
(参照 2019-8-1)
- 2) 文部科学省高等教育局 平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について(平成 27 年度) 文部科学省. 2015
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1398426_001.pdf
(参照 2019-8-1)
- 3) 富樫千秋, 市原真穂, 吉野由美子 他: 全国看護系大学を対象とした初年次教育の実態. 千葉科学大学紀要. 12: 223-230, 2019
- 4) 中村恵子, 柄澤清美, 中村圭子: 看護学生の初年次教育におけるロールプレイングを用いた話の聴き方指導の成果と課題. 新潟青陵学会誌. 7(3): 13-24, 2015
- 5) 柄澤清美, 中村恵子, 中村圭子: 看護学生の初年次教育におけるリーディング指導の効果. 新潟青陵学会誌. 7(1): 11-22, 2014
- 6) 山崎智代, 山崎紀久子, 日向野香織: 初年次教育における効果的な教授方法について—医療保健学セミナーにおけるレポートの書き方に関する一考察—. 医療保健学研究. 7:31-43, 2016
- 7) 日向野香織, 山崎智代, 山崎紀久子: 初年次教育における効果的な教授方法について—討議法の授業に対する学生の自己評価から—. 医療保健学研究. 7: 17-30, 2016
- 8) 東亜紀, 本部美知子, 入江多津子 他: 看護学基礎カリキュラムにおける基礎ゼミナールの試み. 了徳寺大学研究紀要. 6: 95-101, 2012
- 9) 中西順子, 内山久美, 石橋通江 他: 看護系大学 2 年次生における学生支援方法の検討—社会人基礎力育成に向けて—. 純真学園大学雑誌. 5: 97-102, 2016
- 10) 新野由子, 糸井和佳, 清野純子 他: 看護学士課程 1 年生の社会人基礎力の変化 第 1 報—初年時教育の基礎ゼミを通して—. 帝京科学大学紀要. 15: 1-9, 2019
- 11) 留田由美, 今井七重, 足立はるゑ 他: 看護学科における初年次教育の効果探索—入学後 4 か月の自己教育力・自己管理能力を中心に—. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要. 16: 127-134, 2015
- 12) 前田由紀子, 唐崎愛子, 石田佳奈子 他: 看護学科における初年次教育・二年度教育の成果と課題. 西南女学院大学紀要. 16: 15-24, 2012
- 13) 石井美紀代, 鹿嶋聡子, 布花原明子 他: 初年次教育における問題解決型学習の効果. 西南女学院大学紀要. 16: 35-34, 2012
- 14) 一期崎直美, 石井美紀代, 吉原悦子 他: デイバートを活用した初年次教育の試み—看護学生のクリティカルシンキング志向性に着目して—. 第 46 回日本看護学会論文集 看護教育. 46: 71-74, 2016
- 15) 文部科学省: 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
(参照 2019-8-1)
- 16) 山田剛史: 大学教育の質転換と学生エンゲージメント. 名古屋高等教育研究. 18: 155-176, 2018
- 17) 福嶋祐貴: 協働的な学習に関する類型論の到達点と課題—協同学習・協働学習に基づく実践の焦点化と評価のために—. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 64: 387-399, 2018
- 18) 釘原直樹, 人はなぜ集団になると怠けるのか: 「社会的な手抜き」の心理学. pp.1-36, 中央公論新社. 東京, 2013
- 19) 蒲生諒太: ゼミ形式授業における発表活動の学習システム開発—関西大学人間健康学部「導入演習」の事例をもとに—. 関西大学高等教育研究. 10: 65-77, 2019
- 20) 岩井洋, 大学教育の FYE におけるポートフォリオの利用 『初年次教育と第一世代問題』. 高等教育研究叢書 5). 関西国際大学高等教育研究所: 47-69, 2004
- 21) 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部点検評価

- 改善会議 FD 部門：西南女学院大学西南女学院大学短期大学部 2018[平成 30] 年度 授業評価アンケート(前期)【報告書】. p150, 2018
- 22) 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部点検評価改善会議 FD 部門：西南女学院大学西南女学院大学短期大学部 2018[平成 30] 年度 授業評価アンケート(後期)【報告書】. p166, 2019
- 23) 初年次教育学会編：初年次教育の現状と未来. pp.97-112. 世界思想社. 東京, 2013

Efforts of First-Year Education in the Department of Nursing

Katsue Takahashi *, Yuko Meno *, Yasuaki Shinya *, Yukiko Maeda *
Naomi Ichigozaki *, Momoko Sasazuki *, Akiko Mizobe *
Etsuko Yoshihara *, Rinko Zaitso *, Tomomi Nakahara *

< Abstract >

In 2018, a first-year education program (first-year seminars) was investigated and then implemented throughout the college. The present report is in regard to this program.

In the first-year seminars, the fundamentals of study-skills were learned and then reinforced for first-year students. In addition, the seminars include career designs for nursing professionals and items providing motivation for future career paths. A small-step method was used for acquiring study skills, and the amount of text in the reports and the difficulty of the included problems had been increased. In the students' self-evaluations regarding achievement, at least 90% reached their targets. In addition, the rates of the use of libraries and other facilities have increased. In the future, it will be necessary to examine the evaluation indices for education programs.

Keywords: first-year education, study-skills, information literacy, nursing education, small step

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University